

ECONOMIC ANALYSIS MICROECONOMICS

ボールディング 近代経済学 I

微視経済学 上

大石泰彦・宇野健吾 監訳

丸善株式会社

**ECONOMIC ANALYSIS
MICROECONOMICS**

ボールドリング近代経済学Ⅰ

微視経済学 上

大石泰彦・宇野健吾

監訳

丸善株式会社

ECONOMIC ANALYSIS, Fourth Edition

Volume I : MICROECONOMICS

BY

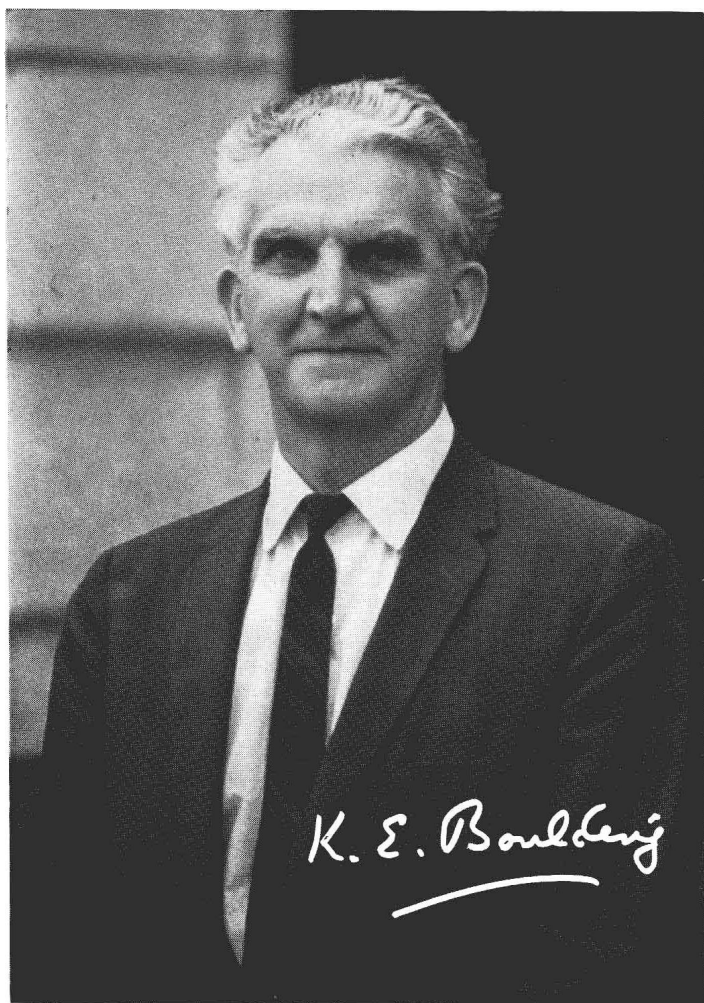
KENNETH E. BOULDING

COPYRIGHT © 1966

BY

KENNETH E. BOULDING

Authorized translation from the Fourth English
language edition published by Harper & Row,
Publishers, Inc.



1964年5月国際基督教大学にて

TO THE MEMORY OF

Elizabeth Ann Boulding

(1880-1961)

Preface for the Japanese Translation
of *Economic Analysis*, 4th edition

It is with particular pleasure that I introduce this fourth edition of *Economic Analysis* to my Japanese readers and friends. Most of the work on this new edition was done while I was a Visiting Professor at the International Christian University at Mitaka, so that in a very real sense these two volumes are a product of my year in Japan, and they owe a great deal to the stimulation provided by my Japanese students with whom many of the ideas of this new edition were first worked out. It is particularly appropriate, therefore, that this new edition, which owes so much to my year in Japan, should now become available for the Japanese reader. I am particularly grateful to Professor Oishi and Professor Uno and their associates who have made this possible.

K. E. BOULDING

Boulder, Colorado
April, 1971

日本版への序文

日本版に対するこの序文を日本で書くことができるのはわたくしにとってなみなみならぬ喜びである。わたくしはいま日本にあってこの書物を——英語で——日本の学生に教えているのである。著者にとって、自己の著作をそれがはじめに書かれた環境とは異なる環境において再検討することは最もためになるところである。そしてわたくしは、たえずわたくし自身の胸奥でわたくし自身が、本書の分析と強調とが日本の社会の諸問題に適当しているかどうかという問いを発しているのをみいだす。だいたいにおいて、わたくしはこの問いに肯定的に答えるものであることを告白せねばならない。たとえ『経済分析』（本訳書の原名）はもともとアメリカの条件を念頭において書かれたものであるにしても、そして例証は主にアメリカの経験からとられ、練習問題は円ではなくてドルで表現されているにしても、それにもかかわらず本書が表明しようと努める基本的諸原理は言語、慣習、文化の諸形態、社会組織などの相違を超越する高度の普遍性を有しているのである。たとえば交換はすべての社会の基礎的な制度である。すべての社会はなんらかの種類の価格構造をもっている。そしてこの価格構造は恣意的なものではなく、それが均衡値のある組からあまりにも離れすぎる場合には動学的な緊張を引き起こす。最も原始的な社会以外のすべての社会は交換の媒介手段すなわち貨幣をもっている。すべての社会はまた、企業のような、全体の経済よりは小さく、たがいに他と関係し合っている経済組織をもっている。すべての社会は——ロビンソン・クルーソーの一人社会でさえも——一つの望ましいもののより多くは他のもののある量を犠牲にすることによってのみ得ることができるという意味において、多少とも交代費用的なものをもっている。たとえ個々の特定の場合作の必要に適合するためにはその手法と結論とは細部において修正を受けねばならぬにしても、経済分析の内容をしてすべての社会に適切なものとするのはまさに、これらのような事実の存在なのである。

日本の経済はその本質的な諸制度において、アメリカにおいて行なわれている経済体系の型に極めて密接しているので、本書の手法においても結論においてもほとんどなんらの修正も必要とはしない。それにもかかわらず、力点において少なくともある変更を必要とするかもしれない日本の背景においては、若干の問いが発せられるのである。たとえばマルク・

ス主義は日本の知識階級の間ではアメリカにおけるよりもはるかに重大な受取られ方をしている。アメリカにおいては有能なマルクス経済学者は五指をもって容易に算しうるにすぎない。それゆえ日本にあっては本書が価格制度と自由市場とに対する反マルクス主義的な弁護であるかどうかという問いが發せられるのには十分の理由があるであろう。本書はこうしたものとしてではなく、むしろ、政治的な偏見を能うかぎり脱却した、経済問題の分析のための一連の知的用具として意図された。しかしながら、わたくしがリカード派でもマーシャル派でも、ないしはケインズ派でさえないと同様にマルクス主義者でもないという事実はいつわれるものではない。教科書の著者の任務は執筆当時におけるその学問の状況と考えられるところをとり上げ、これを学生に対して直截簡明に説明することである。教科書の著者は、自己の特質が広く受入れられなかったかぎりにおいては、この自己の特質を回避する努力をさえずべきであり、その主題の、新鮮にして個性的な文体と両立しうる、最も論争を起こすことのすくない説明を提示すべきである。しかしながらわたくしがここに描こうとつとめた経済学の状態は、全体主義的な社会主義の領域の外にある国々において教えられているような経済学である。本書『経済分析』はモスコーでもブラーグでも使われていないし、ペキンで使われていないこともたしかである。世界をかくも悲劇的に分っているカーテンの両側で等しく受入れられるであろうような経済学の教科書を書くのは興味ある仕事であろうし、しかもわたくしの試みたいと極めて強く感ずるところの仕事でもある。もしかりにこれがなされたとしても、『経済分析』の素材の多くは変更するには及ばぬであろうとわたくしは预言する。けだし交換が社会を組織する一つの方法として用いられるところではかならず、本書に展開した分析上の用具の価値あることがみだされるであろうからである。しかしながらこうした世界全体で使われる教科書においては、経済分析において大いに欠けている一節が付加されねばならぬであろう。これは“授与”——予算配分と一方的移転との実施による経済生活の組織——の理論にかんする一節であると思われる。資本主義的と考えられている経済においてさえも、経済活動の著しい部分が、交換経済によるよりはむしろ“授与経済”によって組織されている。いうまでもなく、全体主義的な社会主義にあっては、経済活動のはるかにいっそう大きな割合が、こうした“授与経済”という形で組織されており、交換経済は末梢的である。交換経済的な環境における意思決定に妥当する諸原理の若干は授与経済にも妥当する。しかし授与経済はまた、交換の分析において十分には達成されぬそれ自らの諸法則と諸原理をも有している。それゆえ本書の読者には、本書は経済組織の全世界のうちの一部分——交換とその分枝とに充てられる部門——の分析を述べるものであるという警告がなさるべき

である。これはすべての経済の本質的な部門であり、資本主義的経済においては支配的な部門、社会主義的経済においては無視されている部門である。こうしてわたくしは本書をマルクス主義者に対してさえすすめることができるであろう。彼らにとっては本書の過誤はなすべからざることを遂行したという罪業よりはむしろなすべきことを遂行しなかった怠慢の罪なのである。

本訳書の底本となった第3版は1958年にはじめて刊行された。そして読者は当然に、本書が今日時代おくれであるかどうかという問いを発するかもしれない。この点においてわたくしはふたたび、おそらくその当時からこのかた経済学者のなした仕事の結果としてほんのわずかのことが付加されねばならぬけれども、さして多くのことがらが除去される必要はないということを読者に再保証しようと考えている。われわれはいまや、価格均衡の諸原理、巨視的経済学および限界分析がニュートンの運動の法則のように、以後の発展によって洗練はされるが、しかしそれによって置換されるのではないという時点に到達しているように思われる。かくして本書が書かれて以来、リニア・プログラミングは経済学の標準的手法となるに至った。しかしまったく正当に、それは、限界分析にとって極めて基礎的である極大化の原理の、実用的には非常に重要ではあるが基本原理においてはなんらの変更をも伴わぬ洗練とみなすことができるであろう。同様に過ぐる十年の間に経済学者の多大の注意をひいた経済発展の理論は、経済学的抽象自体の枠組の内部において、なんらかの偉大な新しい原理を明らかにするというよりはむしろ、経済学者をしてより一般的な社会科学のほうへ歩みよらせたものである。この種の書物の衰退していくことかくも緩徐たるのは、おそらく経済学の停滞的な状況を説明するものであろう。しかし読者は、相対的にはほんのわずかの素材さえ付加されるならば、直ちに経済学の最新の状態に到達しようということはすくなくとも保証されるのである。それゆえ、わたくしは大きな喜びをもって本書を日本の読者に引き合わせるものである。

東京三鷹 国際基督教大学にて

ケネス E. ボールディング

(訳者注) この、日本版への序文は、1963年原書第3版に対するわれわれの訳が完成した際、折よく国際基督教大学に客員教授としてこられていたボールディング教授がよせられたものである。われわれの旧訳に対する序文ではあるが、教授自身の指示もあり、その内容はいままわれわれにとってきわめて意義あるものと信ぜられるので、この訳書の新版にも再録することにした次第である。

監訳者序文

ここにわれわれが訳業を完了し、江湖の諸賢の机辺におおくりしようとしているのは、Kenneth Ewart Boulding, *Economic Analysis*, 4th ed. 1966, 2 vols. [Vol. I Microeconomics, pp.xxiv+720; Vol. II Macroeconomics, pp.xviii+280] の全訳である。全2巻の原書は、邦訳では便宜上3冊に分けて刊行され、本書はその第1冊として、原書第I巻『微視経済学』の前半、第14章までの訳を収録する。(原書第I巻の後半の16章及び付録・索引、原書第II巻は、それぞれ第2冊、第3冊として順次刊行される)。

著者ボールディングは、こんにち世界における第一級の理論経済学者であるとともに、広く社会科学全般に透徹した視野を有し、より高い次元に立って叡智にみちた発言を続けている当代一流の文明批判者でもある。そして既に多くの著書の邦訳、再度にわたる来日(一度は国際基督教大学の客員教授として、一度はNHKの招聘によりテレビを通じての講演に)によってわれわれ日本人にとってもきわめてなじみの深いひとである。著者は長らくミンガン大学の教授であったが、1967年からコロラド大学に移って、現在同大学行動科学研究所のプログラム・ディレクターならびに経済学部教授として活動している。その輝やかなしい経歴と、多くのすぐれた著作とについては、著者自身から送ってこられた略歴および著作目録を後に収載しておいたので参照していただきたい。

本書の初版が刊行されたのは1941年のことであるから、本書も既に30年の歴史をもつことになる。この間、48年、55年にはそれぞれ著しい改訂が加えられ、さらに66年には、一段と徹底した補筆、拡充がなされ、1冊本であった第3版を、『微視経済学』、『巨視経済学』とに分けた2冊本の第4版が刊行された。冒頭にも述べた通り、この第4版が本訳書の底本である。

この30年間に原書はまさに、その受くるに足る声価を正当にわがものとした。ただにアメリカだけでなく、世界のいづこの国においても、本書は、サミュエルソンの『経済学——入門的分析』とともに、最も著名な、最も多くの学徒に繙読され、またされつつある原論の双璧をなすといつてよい。本書の名声のよって来るところはいづこに求められるであろうか。程度はサミュエルソンのそれよりも少々高い。しかしそれははなはだ暢達な筆致で書かれ、些かも難解の感じをおこさせない。これは本書の大きな特長である。しかし

なんといっても本書の最大の特長は、空疎な物知りの知識や、お題目的な、らちもない文言の羅列の一切から絶縁して、ひたすら、この複雑な現実の経済世界を理解するための考え方、視角、分析方法、分析用具といったものを実地的に提供してくれるところにあるといわねばならない。監訳者もまた、旧版のときからそうした感想を強く抱いていたのであるが、このたび訳稿を閲読してみて、さらにさらに強く、本書の見事さに感銘を受けたことであった。ディレタント的もの知りをのぞむひとは他の書物につぐがよい。真に、実社会において種々の経済問題に直面したとき、それに対して正しい判断と処置をなし得る視角と分析技術とを身につけたいと考えるかたには、われわれは絶大の自信をもって本書を推したいと思うのである。本書はいわば、コーヒーはどこそこのがうまい、こんなブレンドがうまい、といった知識を与えるものではなくて、コーヒーの本当の味はこんなものだということを体得させるていの書物なのである。こうした、最も実質的な経済学の入門書として、われわれは、旧版同様、本書が、これから経済学を勉強しようとしている学徒諸君だけでなく、学生時代経済学をあまりやらなかった、あるいはマルクス経済学とか、より古い経済学しかやらなかった、しかもいま経済学の必要を痛切に感じている社会人のかたがたに広く繙読されることを期待している。

われわれはさきに多大の労苦を敢えてして、本書第3版の訳出を完了したのであるが、このたび第4版が刊行されるや、訳書もまた新しきにつかねばならねと考え、鋭意これに従事した。訳業は、旧版同様、かつて東大経済学部において、大石の指導する演習に所属していた諸君のうちの有志によって分担された。その詳細は以下の如くである。

日本版への序文	大石泰彦（東京大学）
第1版への序文	黒沢 有（自治省）
第4版への序文	大石泰彦（東京大学）
第1章	福永四郎（住友ベークライト）
第2章	麻生和正（出光興産）
第3章	五味雄治（国税庁）
第4～5章	斉藤武男（東京大学）
第6章	岡野行秀（東京大学）
第7章	根岸 隆（東京大学）
第8章	桐谷 維（東京都立大学）
第9章	角道謙一（農林省）
第10章	坂下 昇（大阪大学）、司馬正次（北海道大学）

第 11～12 章	平山祐次（経済企画庁）、浜田宏一（東京大学）
第 13 章	小川哲夫（計量計画研究所）
第 14 章	谷 弘一（経済企画庁）

翻訳は、旧訳を参考にしうところは、無論それを参考にして、訂正改善の筆を加えるということにしたが、ともかく、各分担者の責任においてそれぞれ作成した訳稿を、監訳者のひとり大石が閲読加筆するという形式をとって行なわれた。訳出は当然のことながら、なによりも精確を旨として行なわれたこと、分担者の持味による文体の差異については監訳者として強いて統一はしなかったこと、原書に見出された少数のミスプリント、ケアレスミステークは著者の了解のもとに訂正したことなどは、旧版の訳の場合と全く同様である。なお訳書の本文中、ゴシック体のところは原文においてイタリック体のところである。

顧みれば、本書が刊行された折、監訳者のひとり大石はちょうど外遊中であり、プリンストン大学において始めて本書を手にしたというような次第であったが、1968年帰国後間もなく、この最新版による邦訳を新しく刊行しようという議がまとまり、分担者による最初の訳稿は比較的にはやく出来上ったのであった。しかしその後、大学紛争が破局的様相を呈するに至ったこと、その他で、大石による閲読は遅延に遅延を重ね、今日に至ってしまった。この間、辛抱強く待たされた丸善株式会社出版部のかたがたには、序文の筆を擱くに当って、心からおわび申し上げるとともに、この間に示して下さった数々の好意に訳者一同を代表して心からお礼申し上げますの次第である。じっさい正確にいうならば、ささやかではあるが、日本の経済学の勉強にこそさすかたがたへ自信をもっておおくりできる、この贈物は、われわれ訳者と丸善出版部の担当のかたがたとの共同の生産物なのである。

最後に、なおあり得べき誤りについては、読者諸賢の叱正をお願いしたい。

1971年4月26日

監 訳 者

第1版への序文

本書は二重の目的をもっている。すなわち本書は、経済分析の諸方法と諸結果とをそれから学生が学ぶことのでき、またそれによって教師が教えることのできるテキストたることを意図するとともに、経済分析の本体そのものの発展と体系化とに対する一寄与たることをころざすものである。これらの目的を互いに分離することはできない。経済分析の体系的で秩序だった正確な説明をすることは、教えるための材料を準備することとまったく同じである。しかしながらつぎのことは強調しておかねばならない。すなわち、本書の目的は本来学生を楽しませることや、学生をして適当な素材を試験問題集にそのままどすことを可能ならしめることや、少数のうまい文句を覚えることや、あるいは将来決して使うことのないような抽象的教義を彼らに教えこむことにあるのでは決していないことである。経済学はこの点において、写真術と相似している。すなわち露出の不足はまったく露出しないよりも望ましくないのである。そして露出が半分しかなされていない、あまりにも多数の学生がわれわれの高等教育機関から生み出されているのは恐るべきことである。彼らの脳裏に抱かれている経済学の像は曖昧かつ混乱したそれであり、彼らが学んだことは実際問題の分析用具として役立つに足るほどに正確ではない。本書を読み通した学生が少なくとも、経済分析を生活や思想に関する多数の問題の解釈と解決とに有用な教義と認めるに至ること、およびその諸方法を彼の精神の鋭利な用具に加えることができることを希望する。したがって本書は真摯な学生のためのものであって単に学科課程をちょっとのぞいてみるというひとのためのものではないのである。

経済学はその種々の分野が、多くの他の研究においてそうであるよりも、はるかに密接に関連しあっているという点において、特有な説明の問題を提起する。それゆえ分析の大いなる世界全体についてある程度の見通しを把握していない場合、学生はその研究する各部分の意義を見落しがちである。この学問に対する最初の接近に際して、それが関連のない諸原理の絶望的な混乱であるかのように思われることはほとんどの経済学者の経験あるところである。しかしながら、ある期間の研究ののち、学生はこの学問の真の性質と関係

とについて、しばしばまったく突如として、ある啓示を体験するということが生起する可能性がある。そしてそのとき以降、彼の研究するいずれの分野も正しい位置につき、この主題は緊密に統合された全体として映ずるのである。この理由によりわたくしは本書を二つの編に分けた。その各編は半年の学科課程にとつては十分な材料を含む。第Ⅰ部でわたくしは学生が全体の像の大ざっぱなアウトラインをつかむことができるように、可能なかぎり簡単な分析用具を使用しながら経済分析の全分野にわたるように努めた。したがってこの編では需要曲線や供給曲線の基礎にある限界分析を議論することなく、これら両曲線の概念を自明なものとして取扱う。需要供給の概念を主要な分析用具として、価格決定と分配に関する主な諸原理を概説するのである。またこの編では依然需要と供給との分析用具に限定しながら、貨幣、銀行、国際貿易、景気循環の理論をも考察する。

第Ⅱ部では、わたくしは需要曲線や供給曲線の基礎をなす限界分析を詳細に述べるのであるが、そこには資本理論の議論とともに、個別企業や消費や不完全競争と独占の諸理論が含まれている。第Ⅰ部で述べられた基礎によって学生は進むにしたがって、このより難しい材料を彼の研究に統合することができるであろう。この編でわたくしはより難しい材料を異なる章に分離するやり口に従った。それゆえにこの編は二つの水準で研究することができる。すなわち学生は初歩的な水準でこれをずっと読み通すこともでき、あるいはより高等な材料を苦もなくやっつけのけることもできるのである。

本書の配列はかくして、通例そうであるような論題に従っているのではなく、使用される分析方法に従っている。古い四分法——生産、消費、分配、交換——はほとんど完全に姿を消している。それに代ってわれわれは二分法——需要と供給の概念の援用で扱える分析の部分と、限界分析の概念を必要とする部分との——を採用している。需給分析の援用だけで驚くほど多くの事柄を仕遂げることができる。価格の決定、分配と交換の基本的理論、貨幣や国際貿易や景気循環の基本的理論は「限界」という言葉を一度も使用せずにこれを議論することができる。それゆえ初学者にとってかくも苦痛にみちみちたこの言葉は第Ⅰ部には出てこない。第Ⅱ部においてこのすべての分析を彫琢することができる。すなわち需要曲線を効用函数や生産函数から、供給曲線を費用曲線から、引き出すことができ、個別企業の理論全体を作り出すことができる。この方法に欠陥があるとすれば、それは、独占と不完全競争との理論を第Ⅱ部まで延期せねばならないことであろう。それにもかかわらずこうすることには正当な理由が存在する。需給分析の徹底的な基礎教育を受ける前に市場や個別企業の近代的理論に導かれる学生は、特殊な事例の研究に夢中になることによって、しばしばややもすれば、全経済を支配する普遍的原理を見落しがちである。完全

競争の分析から得られた結論はより複雑でより現実的な仮定の導入によって修正はされるが、取って代わられることはない。学生は、これらの新たな仮定によって修正を受けるもののものについて知っているならば、これらの修正の意味するところをより明確につかむことであろう。

それゆえ、本書の方法はいくぶん目新しいものである。それは、分析の種々な論題を、使用される分析用具ないし手段に従って分類せんと努めるものであるから、「手段」的方法とよんでよいであろう。したがって学生がこれらの用具を玩具としてではなく、道具とみなすようになることを希望する。この目的のために、わたくしの信ずるところでは新奇なものとしてのなにがしかの資格があるところの実際の問題にかんする議論の体系を導入した。通例そうであるように、「原理」にかんする一巻と「問題」にかんするもう一巻とがあり、しかもそこではあまりにもしばしば「問題」が「原理」とほとんどあるいはまったく関係をもたないというのではなく、わたくしは原理と問題とを徹頭徹尾統合した。すなわち学生を分析用具に導きこんだ理論的な各節のあとには、そこまでに得られた用具を適用できる実際的问题を取扱う節がみいだされるであろう。たとえば、競争市場における価格決定に関する章に続いてすぐにわたくしは外国為替市場、資本市場、商品市場といった組織化された競争市場の実際問題を論ずる。また正常な需給曲線に関する節のあとには、これらの概念を援用して解くことのできる問題にかんする二つの章があり、以下本書全体を通じて同様である。

これらの問題を選択するに当って、わたくしは、その興味が単にそのときどきの時事問題の性格に集中している問題よりもむしろ、関連のある原理の最上の例示を提供する問題を選ぶように努めた。原理にかんする書物は通俗的な雑誌とも百科辞典とも張り合うべきではないというのがわたくしの信念である。それゆえわたくしは時の経済問題の要約を書くことは努めなかった。なぜなら学生が経済問題に直面しなければならないときまでにはもはやすでに今日の経済問題は時の問題ではないかもしれないからである。学生をしてその青年期よりも円熟期における世界の問題を理解するのに適するような訓練を彼らにあたえるほうがわたくしにはより重要であると思われる。したがって分析方法の厳しい訓練を彼らに施すほうが、時の問題にかんするきこえのよい意見を入れ知恵するよりも大切である。さらにまたわたくしには原論の課程に、実際的であるといった外見を書物にもたせるためだけから、特殊研究における実際的な材料——労働、マーケティング、などの——の大量をつめこむのはばかげていると思える。このような実際研究の位置すべき場所は、学生の履歴のもっとあとのほう、彼が現実の材料のばけもののごとき謎を解釈するための技

法を身につけたときである。

高等数学の知識は本書ではなんら要求されない。第Ⅱ部の程度の高い諸章以外は平面幾何学の知識だけで学生は全部やれるのである。この程度の高い諸章においてさえ、立体図形にかんする、人間でいえば会釈をかわす程度のつき合いといった、ほんのちょっとした知識が必要とされるすべてである。代数学や微積分学を含む材料はすべて注意深く付論に分離しておいた。

ニューヨーク，ハミルトンにて

1941年3月

ケネス E. ボールディング

第4版への序文

本書『近代経済学』の第3版が出てからすでに10年が経過した。この第4版が内容の大幅な書き改めと配列のし直しをとともなうことになるのは、したがって、この間に生じたところにかんがみるならば驚くにはあたらないことである。第4版は2巻に分けられた。第Ⅰ巻つまり本書は『微視経済学』と題される。これは2部に分けれる。その第Ⅰ部は『基礎的価格理論』、第Ⅱ部は『経済行動の理論』と題される。第Ⅱ巻は『巨視経済学』と題される。

第Ⅰ巻の最初の6章は、『近代経済学』第3版の最初の3章の若干の材料を利用するけれども、大部分は新しい仕事である。本『近代経済学』の、各種の版をつらぬく、編成の指導原理のひとつは、より複雑な手法に進むに先立って、簡単な道具立てで経済学のできるだけ多くを展開しようと努力することであった。こうすることによって学生はまさにその出発にさいして、あの、すべての部分が他のすべての部分に依存している、経済分析の完成された全体としての概念をあたえられることになるのである。かくして第Ⅰ巻の最初の6章は2商品経済という極度に単純なモデルのたすけをかりて経済学の主な諸原理を展開しようとの試みを表わすものである。この2商品経済モデルはビーヴァー(海狸)と鹿とのみを生産する「狩猟民族」というアダム・スミスの有名な例からきわめて多くを引きついでいるモデルである。経済学的な思考の本質的な部分のいかに多くがこのごく単純な枠組のなかで展開することができるかは、わたくしをおどろかせたことであるし、おそらく読者をもおどろかせることであらう。

つぎにわれわれは、第7～14章で供給と需要の理論に進む。この部分は本質的には本書第3版第4～12章の改訂である。しかしながら、とりわけ、そのうちの後のほうの諸章では多くの書き改めがなされ、第14章の多くは本質的には新しいものである。この第4版においてわたくしは、終始一貫動学的要因と動学理論との重要性を非常に強調するところがあった。このことは、均衡分析や比較静学を無視すると言うのではない。というのは、じっさい学生たちは、経済生活を理解しようとするならこれらの手法に精通せねばならな